

# メデイア變革前後の詩人と自編詩集

——初唐から北宋末まで——

## 内 山 精 也

### 一、はじめに

詩人であることを自ら強く意識する者にとって、詩作は何物にもかえがたく重要な自己表現手段であったに相違ない。そして、その成果としての作品も、己の價値を他者に證明するため、もっとも主要な據りどころであったはずである。よって、彼らが自作を整理し詩集として保存することに、無頓着であり得たはずはない。つまり己の身分たる作品の總體をどのように世に送り出し、どのように同時代ないしは後世に傳えてゆくか、という問題は、本來、詩人すべてに共通する、もっとも切實なテーマであつたはずである。このような觀點から、本論では、詩人が生前に自撰集を自編する行爲に着目する。この行爲のなかに、詩人としての自意識がもっとも鮮明かつ尖鋭に反映される、と考えるからである。

とはいえ、詩集というのはすぐれて物理的な存在であり、——散篇の詩がともすると記憶という無形の言語情報によって人々の腦裏に刻まれ、口頭によって傳承される可能性を含みもつとは異なり——通常ならば記録媒體を必要不可欠とする。そのため、詩人が生きた時代のメディア環境に大きく左右されたであろう。より具體的にいえば、竹帛か紙かによって、詩集の形態も流傳の實態も大きく變化したであろうし、同じく紙であつても、それが寫本か刻本かによってさらにまた大きく變質した、と考えられる。そして、このような時代的制約は、詩人の自撰集編纂に對する認識や姿勢それ自體にも、直接大きな影を落としたと考えられる。

中國は近代以前に、①〈竹帛〉から〈紙＋毛筆〉へ（三國時代の前後）、②〈寫本＋卷子本〉から〈刻本＋册子本〉へ（唐宋の間）、という二度のメディア變革を體驗したが、本論は、

第二次メディア變革の前後、唐と宋約六百六十年間を対象として、その間における詩人と自撰詩集の關係について探ることを主たる目的とする。その第一弾として、本稿では初唐から北宋末の約五世紀、すなわち印刷時代前史から早期印刷時代に焦點を當てる。南宋の状況については別稿を用意している。

なお、詩集の調査は、唐五代については、萬曼『唐集敍録』（中華書局、一九八〇年十一月）に、宋代については、祝尙書『宋人別集敍録』（中華書局、一九九九年十一月）に依據した。この兩著は現存するテキストを主たる対象として、その源流や各本の系譜を記述するものであり、すでに散佚したものは著録されていない。とりわけ、唐代においては散佚した別集が数多く存するので、該書は唐代詩集の全貌をもれなく再現するものではないが、本稿では便宜的にこの著に基づき、あくまで全體的な趨勢と概要を示すことを主眼とする。

## 二、唐代詩人と詩集の編纂

前掲、萬曼の『唐集敍録』によって、唐代における詩集（別集）編纂の様態を、A「生前の自編」、B「生前の他者編」、C「没後の編」（さらにCaとCbに細分。後述）の別に留意しつつ調査すれば、以下のような二つの顕著な傾向にすぎさま気づくであろう。

第一に、——詩人の生前ないしは没後間もない頃における

——初期段階の編纂過程がまったく分からないものが、半数を超えるという事實である。『唐集敍録』には、唐人の別集一〇八種が著録されているが、そのうち序跋等によって、その過程を推定できるものは、【別表】に掲げた45種しかない。そのうち、詩人が生前その編纂に直接關與していたことを確定できるもの（A類）は、わずかに19種のみであり、全體の二割に満たない。<sup>(1)</sup>

第二に、その二割未満の事例も、大暦年間（七六六〜七九）の前後以降、すなわち、中晩唐にすべてが集中し、唐の前半、初盛唐の約一五〇年間には皆無である。そして、時代が下るほど件数が増える。中唐が7件であるのに對し、晩唐は12件とほぼ倍増している。

この二つの傾向に分析を加える前に、まず幾つかの代表例について見ておきたい。AとCの三類のなかで、詩人の意志と意欲とがもっとも尖鋭に現れ出るのはA類であり、B類がそれに準じる、と考えられるので、本稿でも、A類を中心に考察を進めてゆくが、その前に、約半数を占め、唐代詩集のもっとも一般的な編纂形態であるC類についても、ここで少しく觸れておきたい。

C類は、細部に着目すると様々なバリエーションのあることが知られるが、大別すれば、Ca||兄弟・子孫等の血縁のある者、

門弟、知友等の身近な縁者が遺稿に整理を加えて集にしたものと、Cb || 作者と生前の接觸のない愛好者や信奉者が四方から蒐集採綴して新たに編集したものの、二種類に歸納できる。Caには、04王維、05李白、21韓愈、26柳宗元等の集が、Cbには、03孟浩然、09杜甫、20張籍等の集が含まれる。唐を代表する詩人の集の多くが、C類に属することをここで確認しておく。

なお、本来Cに分類すべきものを【別表】ではAに分類した特殊な例外もある。28李賀と30杜牧の集がそれである。まず、28李賀（七九〇〜八一六）のケースであるが、李賀本人による關連の言説はなく、李賀の没後十五年に當たる大和五年（八三一）に、杜牧が記した序文（上海古籍出版社、『樊川文集』卷十一、一九七八年九月）によって成書の過程がようやく分かる。その序文によれば、李賀が今際の際に、厚い親交のあった集賢學士の沈子明に自編詩集「四編、凡二百一十三首（『樊川文集』卷十では「凡千首」に作る。『文苑英華』卷七一一四の記述に従う）」を託した。しかし、沈子明はその後の數年、職務に忙殺されて東奔西走し、託された詩集も紛失したものと思ひ込んでいたが、とある晩、酔いから醒めて寝つかれず、つれづれに書物箱を整理したところ、亡失したとばかり思っていた李賀の詩集を發見し、往事を偲んで感極まって涙を流した。かくて、杜牧に序の執筆を依頼し、杜牧も再三辭退したものの、沈氏の深情に動かされて序を執筆するに至った、という。おそらく、李賀の詩集

メディア変革前後の詩人と自編詩集（内山）

が世に送り出されたのは、杜牧の序が記された後のこととなるので、前の分類に従えば、Caとなるが、杜牧の序に記された沈子明の言によって、原本が確かに李賀の手編になるものであったことが判明するので、本稿ではA類に分類した。

30杜牧（八〇三〜五三）のケースは、AとCすべての要素を併せもつ。杜牧は大和五年（八五二）、湖州刺史で得た俸給をすべて使って、祖父杜祐傳來の別墅を治め、その翌年、舊作に嚴選を加え、全體のわずかに二、三割の作品だけを遺して、大半を燒棄して自撰集を完成させ（A）、それを甥の裴延翰に託した（B）。裴延翰は杜牧の没後、平素自ら蓄えていて、杜牧が篩い落とした作品を大幅に増補して、計四百五十首の詩文を収める『樊川文集』二十卷に編んだ（Ca）、という（裴延翰「樊川文集序」。前掲『樊川文集』卷首）。現在通行する杜牧の集はすべてこの裴延翰本に基づき、他方、杜牧が自ら嚴選を加え、彼の價值意識がもっとも尖鋭に反映されたであろう自編集はすでに傳わらない。裴延翰本ならば、Ca類となるが、本稿では、杜牧が生前、自作を篩にかけ編集していたという事實を重んじて、Aに分類した。

それでは、以下、詩人としての自意識がもっとも濃厚に反映されると思われるA類を中心に、唐代における自撰集の編纂状況について具體的に見てゆきたい。

## 三、唐代最早期の自編自撰集——中唐前期——

A類の別集のうち、成書がもっとも早いのは、10李華（七一五～六七六）の『李遐叔文集』である。獨孤及（七二五～七七七）の序（四庫全書文淵閣本『李遐叔文集』巻頭）によれば、「前集」十卷と「中集」二十卷からなる、というが、現存するものはわずかに四卷に過ぎない。序には、「前集」が李華の監察御史着任以前の著述を、「中集」がそれ以降、「今に迄<sup>およ</sup>び至る者（迄<sup>およ</sup>至於今者）」を収めることが記され、併せて「中集」が李華の長子李羔の編になることも明記されている。ちなみに、李華が監察御史の任に着いたのは、天寶十一載（七五二）、三十八歳のことである。序にいう「今」が具體的に何時を指すかは不明だが、序文の末尾に、「他日此れに繼ぎて作る者、當に後集と爲すべし（他日繼於此而作者、當爲後集）」という一節があり、「中集」の稱が、將來編まれるべき、「今」以降の所作を収める「後集」を前提にした命名であることが分かる。よって、この「前集」ならびに「中集」が、李華の生前に編まれた集であることは疑いようがない。かつ、「前集」はもとより、「中集」もおそらく次に掲げる顏真卿の「廬陵集」に先行している。「中集」は長子の編なので、右の三分類のなかでは、身内に命じたという点で、AとBの中間的な事例と見なされるかもしれない。李華の文集の後、すぐに編まれたものに、08顏真卿（七〇九

～七八四）の集四種がある。因亮の「顏魯公行狀」（四庫全書文淵閣本『顏魯公集』附録）によれば、永泰二年（七六六、顏氏五十八歳）より後、吉州別駕に除せられ、「廬陵集」十卷を編み、大曆三年（七六八、六十歳）、撫州刺史に移り、「臨川集」十卷を秀才左輔元に命じて編ませ、同七年（七七二、六十四歳）、湖州刺史に移り、「吳興集」十卷を編み、代宗崩御（七七九、七十一歳）の後、禮儀使に任命され、「前後制する所の儀注」を左輔元に命じて「禮儀」十卷に整理させた、という。このうち、廬陵・臨川・吳興三集は詩文を中心とし、いずれも魯公に封じられた（廣徳二年（七六四）後、忠臣としての盛名が全國に知れ渡った晩年二十年間における集であり、「一官一集」の最早期の例でもある。編纂の様態は、A（廬陵集）「吳興集」とB（臨川集）「禮儀」が混在している。

その他、13元結（七一九～七二二）の文集も、大曆二年（七六七）の冬に、元結自身によって編まれている。「文編序」という自序（四庫全書文淵閣本『次公集』巻十二）があり、それによれば、まず天寶十二載（七五三）、進士に推擧された元結が、禮部の有司に「校考」の資として求められて「文編」を編んだことが自編の最初のようなのである。時に元結三十歳であった。そして、四十九歳、道州刺史の任にある時、「近作を次第し、舊編に合はせて、凡そ二百三首、分ちて十卷と爲し、復た命じて『文編』と曰ひ、門人弟子に示して、之れを筐篋に傳ふべきの

み（次第近作、合於舊編、凡二百三首、分爲十卷、復命日文編、示門人弟子、可傳之筐篚耳）」と記している。この序は「大歴三年丁未中冬」、すなわち西暦七六八年十一月に作られているので、死のおよそ四年前のことである。

以上、中唐前期に編まれた集についてその概要を記したが、本稿の主題に立ち返って、彼らの自撰集編集から垣間見られる詩人の意識について分析を加えたい。まず、李華は當時、文章が蕭穎士と並稱され、後世、韓柳の先驅と見なされた名文家である。「前集」「中集」はすでに散佚して傳わらないが、獨孤及の序によれば、「中集」二十卷については、「頌・賦・詩・歌・碑・表・序・論・誌・記・讚・祭文、且一百四十四篇」が収められていた。詩は、あわせて十二種列記される文體の二つを占めるに過ぎず、もっとも主要な文體というわけではない。また、現存の四卷本においても、卷一から卷四の前半までが賦を含む文によって占められ、詩は末尾に二十八首が収録されるのみである。よって、これらの事實を総合すると、李華はまず第一に文章家であり、少なくとも自ら詩人であることをなにより強く意識していた人物ではない、と判断される。

顏真卿の三集も宋代にはすでに散佚し、現存の通行本『顏魯公集』十五卷本には、詩は末尾の一卷に計八首しか収められておらず（『全唐詩』卷一五二でも十首のみ）、詩はあくまでも附録的な位置づけである。とはいえ、權臣元載との政争に敗れ、

メディア変革前後の詩人と自編詩集（内山）

廬陵・撫州・吳興三州に在った時期は、まぎれもなく彼が文の領域でもっとも集中的に活躍した數年間であった。三つの集を自ら率先して編纂したほかに、吳興刺史時代に現地の學者十數名を動員し、積年の願いであった、大型類書『韻海鏡源』三百六十卷をついに完成させてもいる（現佚）。しかし、如何せん、三集の原貌を窺い知るだけの史料がないため、この三集に詩集としての性格がどれほど備わっていたのか判断するすべがない。現存の十五卷本を頼りにする限りでは、顏真卿も李華同様、詩を第一に重視した人物と見なすことは難しい。

元結の「文編」十卷も、すでに散佚して傳わらないが、通行本『次公集』は十二卷で、「文編」と卷数が近く、ほぼ同規模の集と考えられる。少なくとも、李華や顏真卿よりも原本の相貌をより濃く傳えているであろう。そして、『次公集』は、十二卷のうち、四卷分が詩歌で、全體の三分の一を占める。かつまた、詩を前に、文を後にという編集であり、もしも十二卷本が原本の構成を踏襲しているならば、三者のなかで、詩の比重がもっとも重い集ということが出来る。内容的にも、「補樂歌十首」「二風詩」等、儒家的復古思想にもとづく作例が卷頭を飾るほか、元白の新樂府に連なる「系樂府十二首」等の作例もあり、士大夫作家としての意識が前面に出ている。ただし、この傾向はひとり詩歌にのみ見られるものではなく、彼の文においても同様の傾向が認められる。歐陽脩は、「次山 開元・天寶

の時に當たりて、獨り古文を作り、其の筆力は雄健にして、意氣は超拔、韓の徒に減ぜず、特立の士と謂ふべきかな（次山當開元天寶時、獨作古文、其筆力雄健、意氣超拔、不減韓之徒、可謂特立之士哉）（中華書局『歐陽修全集』卷一四一、『集古錄跋尾』卷八「唐元次山銘」、二〇〇一年三月）と、古文復興における元結の先驅的役割を高く評價したが、この認識は今日の文學史においても追認されている。つまり、元結の文學において、詩と文はともに重要であり、元白ならびに韓柳の先驅としての文學史的價值もけつして小さくはない。彼の眞骨頂は詩と文の雙方において先進的な創作活動を展開した、その總合性にあり、北宋以降、標準となる士大夫作家の典型に照らしても、その條件をすでに十分備えている、といつてよい。よつて、他の二者と比べれば、元結の詩人としての功績は間違ひなく大きいが、かといつて彼が己を擇一的に詩人としてより強く意識していたといふ結論には直ちに結びつかない。

李華、顏真卿、元結の三者はいずれも進士及第者であるので、詩賦を含む文辭の創作能力は、當時の士大夫の平均レベルを遙かに超えて優れていた、と考えられる。しかし、詩を中心にして彼らの文學的功績を量つてみると、三者の間にも自ずと輕重の別があり、現存の諸資料を總合すると、詩作の比重は、李華よりも顏真卿が、顏真卿よりも元結が相對的に重い。しかしながら、より嚴密な見方をすれば、三者はいずれも純粹な詩集、

もしくは詩の比重が突出して重い集を自編したわけではなかつた。したがつて、彼らが主體的に自撰集を編んでいたことは確認できるが、そこから彼らの詩人としてとしての明確な自意識を抽出することは、かなり困難だといわざるを得ない。

#### 四、中唐後期の三詩人

##### ——白居易、劉禹錫、李紳——

最早期の三つの事例は、中唐前期、大曆年間前後に集中している。この後につづくのは、23劉禹錫（七七二〜八四二）、24白居易（七七二〜八四六）、25李紳（七七二〜八四六）等、中唐後期の例となる。奇しくもこの三者は同年の生まれであり、ともに進士及第で親交があり、いずれも古稀を超える長壽の一生を送つた。

この三者のなかで、もっとも饒舌かつ系統的に自撰集について語つたのは、24白居易である。というよりも、唐代詩人全體のなかで、彼ほど自撰集について多くを語つた詩人は他に存在しない。もっとも早期の集は、元和十年（八一五）前後、四十年代半ばに編んだ十五卷本である。その編集の意圖や経緯は、「與元九書」（上海古籍出版社、『白居易集箋校』卷四五、一九八八年十二月）のなかで詳細に語られている。このうち、長慶四年（八二四）、五十三歳の頃、元稹に托して、『白氏長慶集』五十卷を編んでもらい（元稹「白氏長慶集序」。前掲『白居易集箋

校』附録二)、その十餘年後、大和九年(八三五)に六十卷に増補して『白氏文集』と題した(『東林寺白氏文集記』。前掲『白居易集箋校』卷七十)。さらに、開成元年(八三六)に六十五卷(『聖善寺白氏文集記』。前掲『白居易集箋校』卷七十)、開成四年(八三九)に六十七卷(『蘇州南禪院白氏文集記』。前掲『白居易集箋校』卷七十)というように、二度増補し、併せて三度、増補のたびごとに、廬山の東林寺、洛陽の聖善寺鉢塔院、そして蘇州の南禪院千佛堂の計三箇所の佛寺にそれぞれを奉納している。そして、死去の一年前、會昌五年(八四五)、七十四歳の時、「長慶集」五十卷、「後集」二十卷、「續後集」五卷の計七十五卷からなる決定版を自ら編んだ(『白氏長慶集後序』。前掲『白居易集箋校』外集卷下)。このように、白居易の自撰集編纂は、四十代半ばから始まり、計五度の増補改訂を重ねており、この主體性や熱意は、他の唐代詩人の追隨を許さない。彼の自撰集には、文も數多く収録されているが、詩を文の前に配していることといい、二千七百首という唐代にあって突出して多いその作品數といい、自序のなかで語られる詩作の姿勢といい、かつまた後世の評價といい、彼が詩人を第一に自認していたことは論を俟たない。

23 劉禹錫については、「劉氏集略說」(上海古籍出版社、瞿蛻園『劉禹錫集箋證』卷二十、一九八九年十二月)という一文に、彼が娘婿の「博陵の崔生」の求めに應じて、舊稿「四十通」(

メディア変革前後の詩人と自編詩集(内山)

「通」は「卷」に同じ)に嚴選を加えて四分の一とし、「集略」十卷を自編したことが記されている。瞿蛻園氏の考證によれば、大和七年(八三三)、劉禹錫六十二歳、蘇州刺史時代のことである。劉禹錫には「集略」のほか、白居易との間の唱和詩を「劉白唱和集」(大和三年(八二九)と「汝洛集」(開成元年(八三六))の二集に、令狐楚との唱和詩を「彭陽唱和集」(大和七年(八三三))に、李德裕との唱和を「吳楚集」(大和七年(八三三))に編んでいる。もちろん、これらは彼個人の別集ではないが、大和七年の前後四年間は、彼の編集意識が旺盛であった時期と見なされる。ちなみに、白居易も、劉禹錫のほかに、元稹と唱和した諸作を「元白因繼集」十七卷に編んでいる。

25 李紳の自撰詩集に對する姿勢は、三者のなかでもっとも穩やかである。開成三年(八三八)に『追昔遊編』を自ら編み、自序(『追昔遊集序』。中華書局、『李紳集校注』、二〇〇九年十一月)を記しているが、そこにはこの詩集が何巻からなり、どのくらいの詩を収めたのが明記されていない。現存テキストでは三卷、百餘篇の詩しか収められておらず、もしオリジナルも現行本と大差ないということであれば、明らかにこれは彼の詩業の全貌を窺うに足る量ではない。かなりの嚴選を加えた佳作選ということになるであろうか。かつまた、詩集名に明らかかなように、ここに收められたのは、宦遊の折々に矚目した景物や體驗した事柄を題材とした作品がほぼすべてであり、早年、白

居易や元稹とともに記した意欲作「新題樂府」二十首（散佚）も含まれていなければ、しばしば詠じたであろう詩友との贈答唱和の作もほとんど含まれない。よって、劉白に共通して認められた積極性や情熱はさほど感じられない。とはいえ、同世代の韓愈や柳宗元が没後によりやく門人や知友の手によって成書したのと比べれば、大きな相違があるといえるであろう。

中唐前期における三者の集はいずれも原本が失われ、集の性格を精確に特定することが難しかったのに對し、中唐後期の三者の集は原本の規模に匹敵する（白居易と李紳）か、もしくはそれを凌駕する規模の別集（劉禹錫）が今日に傳わっている。そして、三者の集における詩の比重はまぎれもなく重い。

第二節において言及した、28李賀のケースも、ここで併せて考えてみるべきであろう。杜牧の序が傳えるところでは、享年二十七の若さで死去した李賀は、死去の間際、平生の自作を編み、「四編、凡二百一十三首」の詩を友人に託していた。かりに自編の時期が最晩年のこととすると、元和十一年（八一六）のこととなり、白居易が初めて十五卷からなる自撰集を編んだ翌年に當たる。そして、李商隱の「李賀小傳」が描く、あたかも詩魔に取り憑かれたかのごとき李賀の姿こそは、われわれが思い描く中國古代詩人の一典型にほかならない。生命をすり減らして一心不亂に詩作に没頭する李賀の形象は、晩唐五代に數多く現れた苦吟型詩人に直接繋がるものでもあった。<sup>(2)</sup>

中唐後期の自編集の特徴は、中唐前期のそれと比べ、詩集としての性格がより前面に出ていることである。詩人としての自意識も、いうまでもなく、より鮮明にそこに投影されている。

## 五、晩唐五代

【別表】では、29〜45の17名が対象となる。うち、七割に當たる12名が生前に自撰集を自ら編んでいる。他者による編を併せると、作者の生前に成書した件数は14件、實に八割を占める。このなかで、特筆すべき二つの現象を採り上げたい。一つは、33李羣玉（？〜八六二？）、37皮日休（八三四？〜八三三？）、43崔致遠（八五七〜九二八？）の三者のケースで、他の一つは、35貫休（八三二〜九二二）のケースである。

前三者に共通するのは、いずれも自編の集を朝廷や官署に獻上したという点である。ただし、43崔致遠に關しては、いささか特殊といえるかもしれない。彼は新羅人で、十二歳の時、唐に渡り、十七にして科擧に及第して官途を歩み始め、二十八の時、新羅に歸國し、留唐十八年の詩文を整理して、時の新羅王、憲康王・金叢に「桂苑筆耕集」二十卷を含む計二十八卷の自編文集を獻上した（崔致遠「桂苑筆耕序」。中華書局、『桂苑筆耕』卷首、二〇〇七年八月）。その二十八卷には、「五七言今體詩共一百首一卷」も含まれていたが、今は散佚して傳わらない。33李羣玉のばあいは、時の宰相、裴休と令狐綯に推擧され、大中



八年（八五四）、「歌行、古體、今體七言、今體五言四通、合三百首」（李羣玉「進詩表」、嶽麓書社、『李群玉詩集』附錄、一九八七年一月）を玄宗に獻じた。37皮日休のばあいは、咸通七年（八六六）に舊稿を整理して「凡二百篇爲十卷」を、おそらく行卷として「有司」に獻上したが、自序（皮日休「文數序」、上海古籍出版社、『皮子文數』卷首、一九八一年十一月）に明記されている。この自序には、先例として、13元結と楊浚が行卷したことも記されている。楊浚については、集が現存せず、詳しいことは分からないが、元結の『文編』については、すでに前述したとおりである。このように、官になるための自薦運動の一環として自撰集を編み呈上ということが、唐代には行われていた。もっとも、13元結のばあいも、37皮日休のばあいも、行卷の主たる内容は詩ではなく、文であったようである。33李羣玉のように、もっぱら詩を推賞され、詩集のみを獻上した例は、むしろ例外に屬する、と見なされる。

後者の、35貫休のケースは、没後ほどなく上梓されたという点が特筆に値する。ただし、別表で採り上げた、自編『西嶽集』十巻がそのまま上梓されたわけではない。没後十年餘、遺稿「約一千首」を、弟子の曇域が改めて編集し直し、『禪月集』と題したテキストが上梓された。前蜀・乾德五年（九二三）の曇域の序（中華書局、『貫休歌詩繫年箋注』附錄「諸本題跋」、二〇一一年六月）によれば、貫休は常日頃、門人たちに、吳融が

メディア變革前後の詩人と自編詩集（内山）

『西嶽集』に序を寄せ、己の詩を李白、白居易、李賀の系譜に連ね、彼らと比較したことに對して、「殊に我が意を解さず」と不満を述べており、曇域に對しても、元稹・白居易・李賀に類すると述べてはならない、私がもし彼らと同時代に生きていたならば、彼らにまったく引けを取らない、と豪語していた、という。かくて、曇域によって、『禪月集』が上梓刊行されるに至った。オリジナルの刊本はすでに散佚して傳わらないものの、當時の資料によって上梓刊行されたことが確定できる最も早期の詩集である。換言するならば、寫本時代から印刷時代への轉換を示す記念碑的詩集と見なされる。

晩唐五代の全體的特徴としては、第一に、本節の冒頭でも指摘したように、生前の自編の件数をもっとも多いことである。唐代19例のうち、12例がこの時期のもので、實に唐全體の六割を超える。第二に、中唐の後期と比較しても、詩の比重が一層高まっていることである。29許渾『丁卯集』、33李羣玉『李羣玉詩集』、35貫休『西嶽集』、36羅隱『甲乙集』、42鄭谷『雲臺編』の少なくとも五集は、純粹な詩集、もしくは詩の比重の極めて大きい集である。

前者については、次節において採り上げる。後者については、晩唐五代という時代の文學史的な特性により多く関わっているように思われる。生前の自編唐集19例のうち、純粹な詩集は、上記の五集を除くと、のこりは25李紳『追昔遊編』と28李賀

『李賀歌詩』の二種しか存在しない。そして、この二種も晩唐に近接する時代に成書したものである。この點をも考慮に入れると、作者自らが詩だけを單獨に一集に編むという營爲は、晩唐に至ってようやく知識層の間で一般化したといえるかもしれない。同時にこの點は、詩というジャンルが獨立專業化してゆく傾向を示しており、晩唐の頃、下層の士大夫詩人が急増したことから、表裏一體の現象と見なされよう。

晩唐五代の自編集は、中唐後期よりも詩集としての性格が一層純化し、その分詩人の自意識もより高まったと見なされる。

## 六、寫本の限界と南方の意義

第二節の冒頭に掲げた、唐人の自撰詩集編纂に見られる二つの傾向について、その原因をここで考察しておきたい。すなわち、現存唐代詩集の過半は編纂過程が不明であることと、自撰集の自編の例が中唐以降ようやく現れ、時代が下るほど一般化してゆくことについてである。

おそらくそれは、ともに寫本という形態に起因する部分があり大きいのではないだろうか。寫本は刻本と較べ、巷間に流通する副本の絶體數がかなり少ない。また、抄寫の過程で收録作品の脱落や改竄が行われる可能性もけつて小さくない。それゆえ、作者の時代から遠ざかれば遠ざかるほど、原本の原貌が失われたり散佚したりする危険性が、いよいよ増大する。泰

平の世であっても、この原則から免れられる集は一つとして存在しない。ましてや大規模な天災や人災がひとたび起されれば、傳本が天壤の間から忽然と消滅する恐れが一氣に高まる、といつてよいであろう。

有唐三百年における書籍の最大の危機は、何といつても、安史の亂（七五五〜七六三）である。唐に入り長期統一政權が樹立されたことにより、關中と中原を中心とする北方中國の文化的求心力も高まり、その結果、全國の書籍が京師に吸い寄せられたに違いない。しかし、北方を主戰場とする大動亂が勃發したことによって、上は宮廷の館閣から下は民間の藏書樓に至るまでが甚大な被害を受け、そのためこの時この世から消失した集も、かえつて少なくなかつた、と推測される。

他方、中唐以降は、日に日に印刷時代に接近しつつあり、そのことが幸いし、北宋以後、逐次刻本に姿を變え、傳存の可能性が高められたのであろう。また、安史の亂後、進士及第者の地位向上に伴い、——進士の出自を象徴する——詩文創作能力の社會的重要性も高まり、それが別集作成への關心を高める結果に繋がった可能性も指摘できよう。<sup>(4)</sup>作家個々人の自撰集編纂の意識が高まれば、序跋を附して、編集の經緯を記録することも自ずと一般化に向かうであろう。

加えて、南方が大規模な戰亂に巻き込まれることが比較的少なく、北方の没落に相反して、經濟力も向上したため、書籍の

生産地ないしは保存地としての機能が高まったことも、要因の一つに数えられる。<sup>(5)</sup>安史の亂終息後、顔真卿が陸續と自撰集を編集したのが、廬陵・臨川・吳興の三地であり、いずれもが長江以南であったことを想起すべきである。また、白居易が畢生の自編文集を奉納する場所として選んだのも、己の暮らす洛陽を除くと、あとは廬山と蘇州の寺院であり、いずれも長江以南であった。さらに、【別表】によって知られるように、晩唐期の詩人の多くが南方出身者、もしくはは南方に活動據点を定めた詩人たちであった。長江以南の地は、唐代、とりわけ安史の亂後、書籍を次代に伝えるのにきわめて重要な役割を果たしたようである。

これに關連して附言すれば、唐代の紙生産地の多くが長江以南に集中していたこと、ならびに主として南方において新たな製紙技術の普及が始まったこと等も、中唐以降の自撰集の増加を考える上で重要な要素かもしれない。潘吉星『中國造紙史』（上海人民出版社、二〇〇九年十一月）によれば、唐代貢紙の産地は常州、杭州、越州、婺州、衢州、宣州、歙州、池州、江州、信州、衡州の十一州で、すべてが長江以南の地である（第四章第二節、一九五頁）。當時の製紙は、楮や藤等の樹皮、もしくはは麻や稻麥等草本植物の纖維を主たる原材料としていたが、唐の後半頃から竹を材料とする竹紙が普及し始めた、という（前掲書第四章第一節、一九四頁）。竹は成長が速く繁殖力も旺盛なの

メディア変革前後の詩人と自編詩集（内山）

で、製紙に樹皮を用いるよりも、明らかに經濟效率がよい。この新たな製紙技術の確立によって、紙の供給量は確實に増強されたであろう。そして同時に、竹の産地である南方の重要性も一層増大したはずである。唐代の後半期、主に南方においてより多く自撰集が編纂されたことの背景に、製紙をめぐるこのような南方の優位性も関わっていた可能性をここに指摘しておく。以上、唐代の詩集編纂に見られる特徴について、物理的法則を含め、その要因を考察した。時代が下れば下るほど、モノがより多く今日に傳わる、というのは理の當然であるが、そのような物理の一般法則を除いても、なお幾つかの特殊な要因を以上のように指摘することができる。

つづいて、もう一つ重要な特徴をここに指摘しておきたい。つまり、詩集を編む目的が何處にあったか、という問題である。結論を言えば、——行巻、つまりは官を得るための自薦行爲として編集した、元結、李羣玉、皮日休等の特殊例を除くと——強半は當該詩人の没後の流傳を第一に意識した行爲であったと判断できる。約半數を占めるC類のばあいは、言わずもがなであるが、詩人の生前に編まれるA・B兩類のばあいも、ほとんどが死去の直前か晩年に入った後に成書したものであり、同時代的な詩名の向上を強く期待しての營爲とはとうてい見なしがたい。自撰集の自編にもっとも高い執着を見せた白居易のばあ

いが、その最たる典型である。彼は死去の一年前まで自撰集の編集に餘念がなかったが、それは己の詩業を後世に正しく確實に伝えようとする意欲と動機に支えられていたと考えてはば間違いない。このように、唐人詩集に見られるもっとも普遍的な編纂目的は、當該詩人にとっての「今」というよりも「未來」、すなわち死後の流傳に重きを置いたものであった。

しかし、この點もやはり寫本時代というメディア環境の特性に大きく制限された發想と見なすことができる。副本の製作に膨大な時間を要し、しかも巷間に流通する絶對量がけつして多くはない寫本時代のリアリティーに基づけば、詩人が生前、己の詩集を自ら進んで編集し、それを同時代の不特定多數の讀者に發信する、という發想そのものがあまり現實的ではなかったのかも知れない。

それでは、刻本が漸次普及し始める宋代ではどうだろうか。むろん、今日のような多種多様なマスメディアが存在する時代とは大きな隔りがあることも確かであろうが、それでも刻本普及の度合いに應じて、作り手の意識に變化が生まれたであろうことも容易に豫測される。次節以降では、本節で整理した事柄を踏まえつつ、印刷時代に突入した宋代において、自撰詩集の編集の何が變わり、何が變わらなかったのかを検討してゆきたい。

## 七、印刷時代の自撰集——北宋初期の實態——

前掲、祝尙書『宋人別集敍録』上・下二冊、三十卷には、計五四二種の別集が収録されている。南北兩宋の過渡期を生きた詩人については、そもそも北宋・南宋のいずれに歸屬させるか大きな問題となるが、本稿では便宜的に、上冊の十五卷分、計一六三種を北宋別集と見なして考察する。一六三種のなかから、もっぱら奏議を収めるもの等、明らかに詩を含まないものや、作者本人が関わらない詩注本等の計十三種を除く、一五〇種の編集形態を示すと、A類54、B類1、Ca類53、Cb類8となる。残る34種は、編集過程未詳のものである。自編意識の高さをストリートに示すA類が、全體の36%を占め、唐の二割未満と比べてかなり増加している。だが、直前の晩唐五代におけるA類の高い占有率（七割）に比べれば、かなり低い。また、純粹な詩集の件数も晩唐に比べるとかなり減少し、詩文兼載が主流の編集に變わり、中唐の状況により近くなった。

とはいえ、もちろん單純な中唐への回歸というわけではなく、幾らかの進展も認められる。北宋初期の例を二つ掲げる。初期の代表的詩人、王禹偁（九五四〜一〇〇一）と楊億（九七〇〜一〇二〇）の例である。まず、王禹偁は咸平三年（一〇〇〇）、『小畜集』三十卷を自編したうえで、自序を記し、集名「小畜」の意圖を説明している。死の一年前のことである。

楊億は景德四年（一〇〇七）、十年間に詠じた詩を整理して、『武夷新集』二十巻を自編し、自序を記している。宋代の史傳と書目（『隆平集』『東都事略』『宋史』等の楊億傳、陳振孫『直齋書錄解題』、『宋史』藝文志等々）がいずれも記録するところによれば、楊億は、「括蒼」「武夷」「潁陰」「韓城」「退居」「汝陽」「蓬山」「冠麓」等計八種の詩文集を遺した、という。序跋がないため、「武夷」以外の集の詳細は分からないが、集名から類推すると、官歴にほぼ即應した「一官一集」の編集と見なされる（上海古籍出版社、李一飛『楊億年譜』、二〇〇二年八月、参照）。王禹偁と同じくA類の自編自撰集ではあるが、一定期間ごとに集を編んだ顔真卿の系譜に連なる。ただし、顔真卿の自撰集が晩年の一時期に偏っているのに對し、楊億の「一官一集」は生涯を通じて續けられたので、それがいっそう徹底されたものといつてよい。

この兩者の事例は、いずれも唐代の延長線上にあるものだが、王禹偁は集の命名にこだわりを見せ、楊億は生涯にわたって自撰集を自編しつづける等、唐代詩人よりも主體意識が明らかに一步進んでいる。しかし、彼らの自編集が生前に出版された可能性はかなり低いと見積もられる。王禹偁の『小畜集』は死去の一年前に成書したものであるし、現存資料によって確定できる、もっとも早い刻本は、南宋の紹興十七年（一一四七）に、黃州郡齋において刊行されたもので、没後すでに一世紀半の時

メディア變革前後の詩人と自編詩集（内山）

が流れている。楊億のばあい、前掲八種の自編集のうち、「武夷」、すなわち『武夷新集』を除いてすべて傳わらない理由を、祝尚書氏は、『武夷新集』のみが刊刻され、その他は刊刻されなかったからであろうと説明する（上冊七二頁）が、その確證は何も示されていない。時代は確かに印刷時代に突入したが、現存資料による限り、北宋初期の段階では、唐および唐以前に成立した經典的書籍が校定されて刊行されるケースがほとんどであり、同時代文學の出版印刷はまだ本格的には始まっていない。よって、『武夷新集』が彼の生前に刊行された可能性もかなり低いと判断せざるを得ない。印刷出版業と同時代文學の連攜には、なおしばらくの時間を要すると考えるべきであろう。では、詩人の自撰集が生前に刊行されたと確定できる、もっとも早期の事例はいったい何時頃のことなのだろうか。

## 八、宋人自撰集の生前刊行

現存資料で確定できる、生前に刊行された自撰集のもっとも早期の例は、李觀（一〇〇九〜五九）の「外集」である。李觀の第一自編集『退居類稿』十二卷（慶曆三年（一〇四三）成書）と第二自編集『皇祐續稿』六卷（皇祐四年（一〇五二）成書）には、それぞれ自序があり、後者の自序に、慶曆六年（一〇四六）、『退居類稿』成書後三年間に書き溜めた百篇餘の原稿を何者かが盗み、勝手に「外集」と題して「刻印」したことが記さ

れている（『皇祐續稿序』。中華書局、『李觀集』卷二十五、一九一一年八月）。時に李觀は三十八歳であつた。李觀はこの「外集」に對し甚だ不満であつたようだが、皮肉にもそれが宋人文集が作者の生前に刊行された最早期の確かな事例となる（『退居類稿』と『皇祐續稿』が刊刻されたか否かは不明）。ただし、李觀は自他ともに認める學者であり、その本領は古文によって記された論や策にあつた。少なくとも彼が詩人を自認していた形跡はない。よつて、この「外集」も、今日の意味における文學作品を中心に編集されたものではなかつたはずである。

しかし、いづれにせよ、李觀の「外集」刊行は、民間の出版業が同時代作家の作品集を營業對象とし始めたことを示す象徴的な事例といつてよい。このように、11世紀の半ばに至つて、印刷業はようやく官民を擧げての發展期を迎え、詩人が生前に自撰集を刊行することも、いよいよ現實味を帯びるようになった。これ以後は、詩人としての自意識の指標として、生前の自編はむろんのこと、さらにそれが生前に上梓刊行されたか否かが、より重要となる。

生前の刊行とA類の自編とは、そもそも編集の目的が本質的に異なる。A類の自編は、前述の通り、主として作者の没後の流傳を目的とした行爲であつた。それに對し、刻本のメディアの特性は、なによりも内容の均一性と傳播の速さならびに廣さにある。したがつて、生前に詩集を上梓刊行することは、ま

ず第一に作者と同時代の讀者ないし購買層を強く意識し、彼らに向けた事業であつたはずである。結果的にそれが後世への流傳を助けることになつたとしても、それはあくまでも副次的な効果であつて、主たる目的ではおそらくない。とりわけ、出版元が民間の書肆となれば、投資した經費の速やかなる回収とより大きな利潤を求めたに相違ないから、速售多賣を第一に目指したのであろう。したがつて、生前の詩集出版は、同時代の人々にその詩業を廣く知らしめることを第一の目的とする、すぐれて同時代的な社會的營爲と見なしうる。

では、詩を中心とする文學的作品集が作者の生前に刊行された最も早期の事例は、いつたい何時のことであろうか。それは、李觀の「外集」よりさらに三十年降つた、元豐元年（一〇七八）〜同二年の間の、蘇軾（一〇三七〜一一〇一）の詩集『元豐續添蘇子瞻學士錢塘集』三卷であろう。蘇軾には、刊期がそれより幾らか先行する可能性のある『眉山集』という集もあるが、この『錢塘集』の方がより確實に刊行の時期を特定できる。この集は、すでに別稿<sup>(7)</sup>で詳論したように、當時の公文書「烏臺詩案」（懺花盒叢書本）にその名が「つぶさ」に記録されている（『御史臺檢會送到冊子』ほか、「今板に鏤みて市に鬻がるる者を取りて進呈す（今獨取鏤板而鬻於市者進呈）」（『監察御史裏行何正臣札子』）とか「印行四冊」（『監察御史裏行舒置札子』）等々の

文言が記されていることにより、民間の書肆による坊刻本であったことが分かる。さらに、書名に「元豊續添」の四文字が冠せられていることから、元豊元年から蘇軾が彈劾された元豊二年五月までの間に、既刊の『錢塘集』の増補版として刊行されたものであったことも分かる。また、蘇頌（一〇二〇～一一〇一）によれば、彼が知事として杭州に在任した、熙寧九年（一〇七六）四月から約一年の間に、高麗の使者が杭州の街で蘇軾の詩集を買い求めて歸國した、という（己未九月、予赴鞫御史……」其二の自注。中華書局、『蘇魏公文集』卷十、一九八八年九月）。彼らが買い求めたのは、時期と地點を總合すると、初版の『錢塘集』であったと推測される。この蘇頌の言によって、『錢塘集』の初刻本は、どんなに遅くとも、熙寧九年までに民間で出版販賣されていたことが知られる。ちなみに、熙寧九年の年、蘇軾は四十一歳であった。

もちろん、この『錢塘集』の原本は現存しないが、この集に収められていたのは、「烏臺詩案」の供述記録によって、蘇軾が杭州通判在任中（熙寧四年（一〇七二）十一月～同七年九月）に詠じた詩が中心となっていたことも判明する。この蘇軾の例によって、詩集の生前刊行が、李觀の「外集」の約三十年後には實現していたことを確認できる。しかも、最晩年に畢生の詩集として編纂刊行されたのではなく、作家として脂の乗った壯年期にあり、同時代の誰よりも注目を集める詩人の作品群が、

メディア変革前後の詩人と自編詩集（内山）

生み落とされて數年しかたたぬうちに上梓されたものであり、まさにリアル・タイムの同時代文學作品集といってよい詩集であった。

蘇軾の同世代もしくは下の世代の詩人たちにとって、己の集を生前に刊行することは、けっして現實離れた夢物語ではなくなつた。現實に、蘇軾以外にも、蘇轍（一〇三九～一一二二）、ならびに蘇門四學士の黃庭堅（一〇四五～一一〇五）、晁補之（一一〇五～一一〇〇）、張耒（一一〇四～一一一四）の三者、計四名の集が彼らの生前に刊行されていた事實を、當時の史料によって裏づけることができる。徽宗の崇寧二年（一一一三）四月の敕令がそれである。その敕令は、「三蘇、黃、張、晁、秦、及び馬涓の文集……等の印板、悉く焚毀を行へ（三蘇、黃、張、晁、秦、及馬涓文集……等印板、悉行焚毀）」（『皇宋十朝綱要』卷十六、『皇朝編年綱目備要』卷二十六、『續資治通鑑長編紀事本末』卷一一二、『宋史』徽宗本紀等）というものである。一連の「元祐黨禁」に關わる敕令の一つで、三蘇と蘇門四學士等の文集の版木を廢棄することを命じた内容である。それは、裏を返せば、發令の當時、三蘇と蘇門四學士の文集が確かに刊行され流布していたことを紛れもなく證明している。崇寧二年の時點で、三蘇のうちの蘇洵と蘇軾、さらに秦觀の三者はすでに他界していたが、蘇轍、黃庭堅、張耒、晁補之の四名は存命中であった（馬涓は未詳）。よって、この敕令によって、蘇轍を始めと

する四人の集の、生前刊行を確定できる。しかしながら、それらの具體的な刊期も、集の内容もまったく不明である。

## 九、自編と上梓の距離

以上のように、北宋の中後期、李覲から蘇軾、蘇軾から蘇門四學士というように、世代が下になるにつれ、生前刊行の件数が確實に増加していることを看取できるが、彼らが出版とどのように関わったか、という主體性・積極性に着目してみると、むしろそこには、とてもポジティブとはいえない難い彼らの姿勢が、一様にあぶり出されてくる。

まず、李覲は、原稿が何者かに盗まれ、本人の與かり知らぬ間に刊行されたと述べており、己が被害者であることを強調している。蘇軾も、「烏臺詩案」の後、知人が書簡を寄こし彼の詩集を刊行したいと願ひ出た時、「某方に市人の利を逐ひ、好んで某が拙文を刊するを病み、其の板を毀たんと欲す（某方病人人逐於利、好刊某拙文、欲毀其板）」（「答陳傳道五首」其二。中華書局、『蘇軾文集』卷五十三、一九八六年三月）と述べ、その申し出をきっぱり断っている。このように、生前刊行を實現した初期の両者は自撰集の刊行に對し、けっして前向きな姿勢を示してはいない。

李覲の時代はともかくも、蘇軾の時代になると、民間の印刷出版業は宋初と比べれば長足の發展を遂げていた。「烏臺詩案」

の勃發が、紛れもなくそのことを證明している。「烏臺詩案」では、蘇軾の詩が「小なるは則ち板に鏤まれ、大なるは則ち石に刻まれ、中外に傳播（小則鏤板、大則刻石、傳播中外）」（「監察御史裏行舒亶札子」）したことが問題視され、疑獄の發端になったほか、民間で刊刻された前掲『錢塘集』が證據物件として朝廷に呈上されている。この事象は、民間の出版業が同時代文學を出版對象と見なすようになったこと、さらにはその出版が中央の監察機關の注意を喚起するまでの社會的影響力を持ち始めたことを示唆している。蘇軾自身も「烏臺詩案」の直前、熙寧九年（一〇七八）十一月に記した「李氏山房藏書記」（前掲『蘇軾文集』卷十一）のなかで、民間出版業の隆盛により書籍の入手が半世紀前よりも格段と容易になった、當時の書籍生産ならびに流通における急激な變化を傳えている。

蘇軾の下の世代、蘇門四學士たちは、己の集の生前刊行について何一つ語っていないが、彼らの集の生前刊行を可能にしたのも、民間出版業のこのような發展が大いに與っていたと考えられる。その一方で、蘇轍や蘇門四學士たちの心理を忖度すると、その狀況を必ずしも手放して歓迎できない、ある種の警戒感、もしくは防衛本能が働いたであろうことも、想像に難くない。彼らのもっとも身近なお手本であった蘇軾が、詩が原因で死地に置かれ、しかも民間で刊行された詩集が動かぬ證據として彼をますます窮地に陥れたことを、彼らはつぶさに知って



いるからである。「烏臺詩案」(元豐二年(一一〇七九))、さらには蔡確の「車蓋亭詩案」(元祐四年(一一〇八九))という、詩をめぐる二度の疑獄が彼らの目前で連続して発生したという現実には、生前刊行に對し、彼らを逡巡させるのに餘りある先例となつたに違いない。そのことを強く暗示するかのように、北宋後期の生前刊行を確定できる詩集は、疑獄や發禁處分等、新舊黨争の絡みで史料に記録されたものがほとんどすべてであり、今日的に見ても、とつてい好意的にとらえることのできないネガティブな事例ばかりであつた。

このような流れを考慮すると、蘇轍と蘇門四學士の集の出版刊行も、彼らがそれに主體的に關わつていた可能性は甚だ低いと考えられる。

もっともそれは、北宋後期の詩人たちが自撰集の編纂に無關心であつたことを同時に示すわけではない。作者が自撰集を生前に編定することそれ自體は、北宋中期以降、かなり普遍的に見られるようになっていた。たとえば、歐陽脩の『居士集』は、生前自ら編定したものとされる(周必大「歐陽文忠公集跋」。中華書局、『歐陽脩全集』附録、二〇〇一年三月)。蘇轍の『欒城集』が自編集であることは、自序に明記されている(蘇轍「欒城後集引」・「欒城第三集引」。中華書局、『蘇轍集』、一九九〇年八月)。また、黃庭堅が早年の作に嚴選を加え大半を燒棄して残り『焦尾集』と命名し、のち『敝帚集』と改名した逸事が、兄の

メディア變革前後の詩人と自編詩集(内山)

黃大臨の言として傳わっている(四庫全書文淵閣本、葉夢得『避暑錄話』卷上)。秦觀(一一〇四九〜一一〇〇)も、進士及第の前年、元豐七年(一一〇八四)に『淮海閒居集』十卷を自ら編定している(秦觀「淮海閒居集序」。上海古籍出版社、『淮海集箋注』後集卷六、一九九四年十月)。晁補之(一一〇五三〜一一〇〇)も、元祐九年(一一〇九四)に自ら『雞肋集』を編み自序を記している(晁補之「雞肋集原序」、文淵閣四庫全書本『雞肋集』卷頭)。このように、11世紀後半以降、北宋後期になると、作者が生前に自撰集を編定することは、もはやスタンダードになりつつあつた、とさえいってよい。

自撰集編定に對する自覺的な姿勢が、ただちに生前刊行に直結しなかつたのは、一つにはこれまで述べてきたように、新舊黨争によって言論環境が悪化し、彼らが意識的に出版と距離を置いたという事態を想定できる。しかし、より本質的には、詩人である以前に彼らが士大夫であつた、という點が大きく作用している可能性をここで指摘しておきたい。この點については、稿を改め南宋の状況を論じる際に改めて考察する。

(待續)

#### 【注】

- (1) 今日に別集が傳わるのは、遑れば當該の作者が生前のこのタイミングで自作の整理や保存に努めたからこそで

## 中國詩文論叢 第三十四集

ある、という立場に立つことも可能であろう。しかし、本論では、その關わり方が不明のものについては、一樣に考察の対象から除外した。本論は、詩人としての自意識もしくは自覺が、メディア革命の前後でどのように變化したのかを考察することを主たる目的とし、自編詩集に着目することによってそれを系統的に探るという方法を探る。よって、編集の過程が不明なものは、そもそもそれを具體的に分析する術がない、と判断されるからである。

(2) 岡田充博「中晩唐期に見られる詩文學への没頭的風潮について―詩人達の文學的自覺の問題を中心に―」（『名古屋大學文學部研究論集』26、一九八〇年）参照。

(3) なお、貫休の『禪月集』に先んじて、遅くとも五代の初期に詩集が刊行されていた可能性を示唆する資料もある。孫光憲（？〜九六八、五代十國の一、荆南に仕えた）の『北夢瑣言』卷七に、蜀眉州青神の人陳詠（？〜？）と杜光庭（八五〇〜九三三）の對話が引用されており、陳詠の詩巻を見た杜光庭が巻首の對語を見て、先輩にはもっと好い佳作があるのに、なぜこの句を冒頭に配したのかを尋ね、陳詠が以前、權貴に稱贊されたことを理由に「刻於首章」と答えた條がある（上海古籍出版社、宋元筆記叢書本、一九八一年十一月、五六頁）。李致忠氏は論文「五代版印實錄與文獻記錄」（國家圖書館『文獻』二〇〇七年第一期、三一―一四頁）のなかで、「刻」の字を根據に、この條を陳詠が自編文集を自ら雕印したことを示す資料と見なしている。た

だし、陳詠の詩は、『全唐詩』においても、わずかに『北夢瑣言』に引かれた斷句だけしか収録しておらず（卷七九五、中華書局本第二十二冊八九四九頁）、詩集はおろか、一首すら完全な詩が今日に傳わらない。當時の「詩卷」がいかなる形態をしていたのかも、嚴密に言えば、もはや知る術はない。本論は萬曼『唐集敘錄』著録の集を對象として考察を進めたので、散佚して傳わらない陳詠の集は對象外となるが、もしも李氏の推定が正しいとすれば、貫休の詩集を遡ること約半世紀の昔に自編集が刊行され、しかも生前に刊行されていたことになる。

(4) かつて拙稿でこの問題を論じたことがある。「王安石『明妃曲』考」（研文出版、『蘇軾詩研究 宋代士大夫詩人の構造』第十二章、五〇九頁）参照。

(5) 安史の亂を境として、唐代における經濟・文化の中心が南遷したことについては、文化地理學關連の論著が均しく説くところである。たとえば、陳正祥『中國文化地理』（生活・讀書・新知三聯書店、一九八三年十二月）第一篇「中國文化中心の遷移」、二「逼使文化中心南遷の三次波瀾」（三頁）、曾大興『中國歷代文學家之地理分布』（湖北教育出版社、一九九五年十月）第五章「隋唐五代文學家的地理分布」、第二節（二六六頁）等参照。

(6) 曾棗莊「蘇軾生前著述編刻情況考略」（巴蜀書社、曾棗莊『三蘇研究』所收、一九九九年十月）に、關連の考證がある（二二八頁）。

(7) 拙稿「蘇軾の文學と印刷メディア」、ならびに「東坡烏臺詩案考」参照（研文出版、拙著『蘇軾詩研究——宋代士大夫詩人の構造』所収、第四〜第六章、二〇一〇年十月）。

本稿は、二〇一五年度日本學術振興會科研費基盤(B)「宋人文集の編纂と傳承に關する總合的研究」(研究代表者 九州大學・東英壽)による研究成果の一部である。

## 【別表】 唐人別集編纂状況

- ・白抜数字は生前の自編集を、四角で囲った数字は生前の他者編の集を指す。
- ・A=生前自編集、B=生前他者編、Ca=自編集の没後公開、Cb=没後の他者編
- ・出身地の網かけは長江以南の出身であることを示す。

詩人名	生卒年	集名	形態	根 據	出身
01 王 績	650-676?	王子安集20	Ca	呂才(?-665)序	絳州龍門
02 王 勃	590-644	東臯子5	Ca	楊炯(650-693?)序	絳州龍門
03 孟 浩然	689-740	孟襄陽集4	Cb	天寶四年(745)王士源編	襄陽
04 王 維	701?-761	王右丞集10	Ca	弟・王縉(?-781)「進王右丞集表」	河東
05 李 白	701-762	草堂集20	Ca	魏顥、李陽冰序	西域碎葉
06 儲 光羲	706?-762?	儲公集70	Ca	顧況(727?-816?)序	潤州
07 蕭 穎士	709-760	蕭穎士文集10	Ca	李華(715-766)序	潁州汝陰
08 顏 真卿	709-784	廬陵集10ほか	A	因亮「顏魯公行狀」	京兆長安
09 杜 甫	712-770	小集6	Cb	樊晃序	河南鞏縣
10 李 華	715-766	李華中集20ほか	A	獨孤及(725-777)序	趙州贊皇
11 岑 參	715?-770	岑嘉州集8	Ca	杜確編	荊州江陵
12 皇甫 冉	717-770	皇甫冉詩集3	Ca	弟・皇甫曾編、獨孤及序	潤州丹陽
13 元 結	719-772	文編10	A	大曆二年(767)自序	汝州魯山
14 皎 然	720?-?	杼山集10	B	貞元八年(792)于順序	湖州
15 獨孤 及	725-777	毘陵集20	Ca	梁肅(753-793)編序、李舟序	洛陽
16 顧 況	727?-816?	華陽集20	Ca	皇甫湜(777?-835?)序	蘇州
17 歐陽 詹	759-802	歐陽詹文集10	Ca	大中六年(852)李貽孫序	泉州晉江
18 權 德輿	761-818	權氏文集50	Ca	孫・權憲編、楊嗣復(783-818)序	潤州丹陽
19 李 觀	766-794	李觀文集3	Cb	大順元年(890)陸希聲序	趙郡
20 張 籍	766?-830?	木鐸集12	Cb	乾德三年(965)張洎編序	和州烏江
21 韓 愈	768-825	昌黎先生集41	Ca	門人・李漢編	鄧州南陽
22 呂 溫	772-811	呂和叔文集10	Ca	劉禹錫序	河東
23 劉 禹錫	772-842	劉氏集略10ほか	A	自序	洛陽
24 白 居易	772-846	白氏文集75ほか	A	自序	下邳
25 李 紳	772-846	追昔遊編3	A	開成三年(838)自序	無錫
26 柳 宗元	773-819	河東先生集30	Ca	劉禹錫編序	河東
27 賈 島	779-843	小集3	Ca	許仙、無可編	范陽
28 李 賀	790-816	李賀歌詩4	A*	自編、沈子明/杜牧、大和五年(831)序	福昌
29 許 渾	791?-?	丁卯集3	A	自序	潤州丹陽
30 杜 牧	803-853	樊川文集20	A*	自編、裴延翰序	京兆萬年
31 方 干	809-888?	玄英先生詩集10	Ca	楊弁・方邵編、乾寧三年(896)王贊序	睦州清溪
32 劉 蛻	821?-?	文泉子10	A	自序	長沙
33 李 羣玉	?-862?	李羣玉詩集3	A	大中八年(854)自序	澧州
34 孫 樵	?-?	孫樵文集10	A	中和四年(884)自序	關東
35 貫 休	832-912	西嶽集10	A	光化二年(899)吳融序〔前蜀〕	婺州蘭溪
36 羅 隱	833-910	甲乙集10ほか	A	自序〔吳越〕	新城富陽
37 皮 日休	834?-883?	文藪10	A	咸通七年(866)自序	襄陽竟陵
38 陸 龜蒙	?-881?	笠澤叢書3	A	乾符六年(879)自序	蘇州吳縣
39 韋 莊	836?-910	浣花集20	B	天復三年(903)弟・韋諷編序〔前蜀〕	京兆杜陵
40 司空 圖	837-908	一鳴集30	A	光啓三年(887)自序	河中虞鄉
41 杜 荀鶴	846-904	唐風集3	B	景福元年(892)顧雲(?-894?)序	池州石埭
42 鄭 谷	851?-?	雲臺編3	A	乾寧元年(894)自序〔吳〕	袁州宜春
43 崔 致遠	857-928?	桂苑筆耕20	A	中和六年(886)表進序(新羅王へ進呈)	新羅
44 齊 己	864-938	白蓮集10	Ca	孫光憲編 天福三年(938)〔吳・荊南〕	長沙
45 李 中	?-?	碧雲集3	Ca	開寶六年(973)孟賓于序〔南唐〕	九江